

## 武蔵松山城の文化・歴史的背景

倉上洋行

### “The cultural and historical background of Musashi Matsuyama Castle”

Hiroyuki KURAKAMI

#### Abstract

This report is a document about "Musashi Matsuyama Castle" which is next to the campus of Musashigaoka college. Historical textbooks for school students don't explain about "Musashi Matsuyama Castle" in detail. And so, details are gathered up from various viewpoints and arranged. It is for making a future contribution to raise town-value through the celebrity improvement of the local cultural asset.

Key Word (5語程度): Musashi Matsuyama Castle, Saitama, Yoshimi, Japanese history, archives, local cultural asset

#### I はじめに

埼玉県比企郡吉見町の松山城跡(県指定史跡)は、吉見百穴(国指定史跡)や、岩室観音(町指定建造物)、武蔵丘短期大学に隣接しており、多数の文化財と学園が隣接するという立地条件にある。

松山城は、学校等で利用されている歴史教科書・参考書等では詳細な記述がみられないため、一般的には歴史的な意義や文化的な価値があまり知られていない。

一方、地方の農村にとって、史跡・文化財の知名度向上は町おこしを考える上で重要な意味がある。そこで、本稿は、武蔵松山城に関する文化・歴史的な背景を様々な視点から整理し、地域に根ざした情報収集の礎づくりに向けての資料とした。

#### II 所在、及び建築的側面

##### 1. 我が国の松山城の呼称

松山城と呼ばれる城郭は、我が国に3城ある。この3城を区別するために、それぞれ、武蔵松山城(武州松山城)、備中松山城(高梁城)、伊予松山城という呼称で、しばしば呼ばれている。各城は、それぞれ、埼玉県比企郡吉見町、岡山県高梁市、愛媛県松山市に位置している。

本稿は、このうち、武蔵丘短期大学のキャンパスに隣接する武蔵松山城についてのものであり、以下、本文中では、武蔵松山城を松山城とする。

##### 2. 築城当時から天守閣を有しない松山城

近世の城の象徴たる天守閣は、戦国時代、織田信長の築いた安土城が手本となっている<sup>1)</sup>。

我が国の名城のうち、復元、復興、及び模擬再建ではない、現存天守閣を有する城は、弘前

表 1. 建築様式の時代的変遷

時 代	主な建築様式
律令時代	古代城柵
平安・鎌倉時代	武士団が四方に堀や土塁を巡らせた館
南北朝時代	自然の地形をそのまま利用した山城。
戦国時代	山の上に櫓などの木造建築物を造った、より堅固な城

城（青森）、松本城（長野）、丸岡城（福井）、犬山城（愛知）、彦根城（滋賀）、姫路城（兵庫）、松江城（島根）、備中松山城（岡山）、丸亀城（香川）、伊予松山城（愛媛）、宇和島城（愛媛）、高知城（高知）の12城である<sup>2)</sup>。このうち、松本城、犬山城、彦根城、姫路城と、現在 天守を持たない二条城（京都）の5城が国宝<sup>3)</sup>に指定されている。のこりの7城と熊本城（熊本）の宇土 櫓 他が重要文化財<sup>4)</sup>に指定されている。このうち、国宝指定となっている二条城（京都）は、江戸時代に天守を失ったものの、その景観が高く評価されている<sup>4)</sup>。

ところで、本来、城というものは土塁でできていて、弥生時代の吉野ヶ里遺跡のような環境集落も城と見做すことができる<sup>3)</sup>。松山城は、中世に築城され、その後、城が栄えた時代から現在に至るまで、一度も、天守閣を有したことがない。一般観光客は天守閣を有する城郭こそが、観光に値するものと見做している向きが多い。そのためか、天守閣のない城郭は、どうしても、華やかなイメージとは程遠いイメージになってしまう傾向がある。しかし、前述の二条城

のように、天守閣以外の視点で高い評価を受ける城郭もあることから、松山城についても様々な視点から、その価値を再考し、より多くの人々に認知される城郭にすることは可能といえる。

### 3. 中世から現存する空堀

松山城は、中世から現存する空堀を有するという点では、城郭の建築様式の歴史的変遷を考える上で重要な史跡といえる（表1）。

松山城の本格的な築城は、応永6年（1399）と見られる。中世以来の古城にしては城址がよく保存されている<sup>5)</sup>。曲輪と堀が明確な丘の中心部で、平坦地と堀の面積を比べてみると、平坦地が約130アールなのに対し、堀は約137アールと、堀の比率が非常に高い構造である<sup>6)</sup>。ことが特徴である。

## Ⅲ. 歴史的側面

### 1. 深谷城—川越城 間の防御線

深谷城・鉢形城・越生館・川越城は、太田道灌築城と考えられている。このうち、深谷城と川越城間は、直線距離にして40kmと余りにも

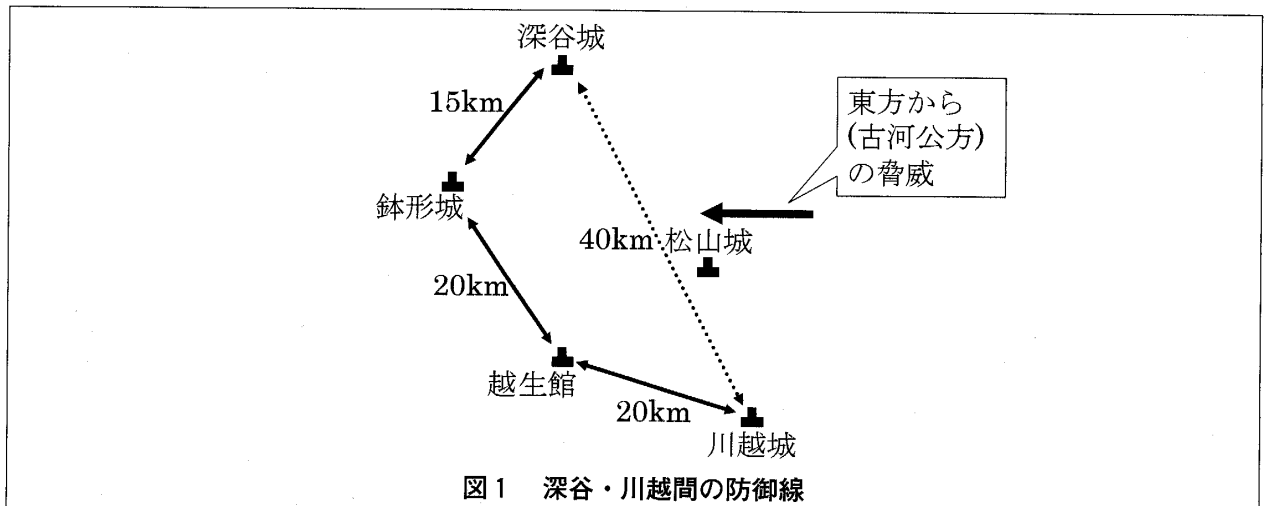


図 1 深谷・川越間の防御線

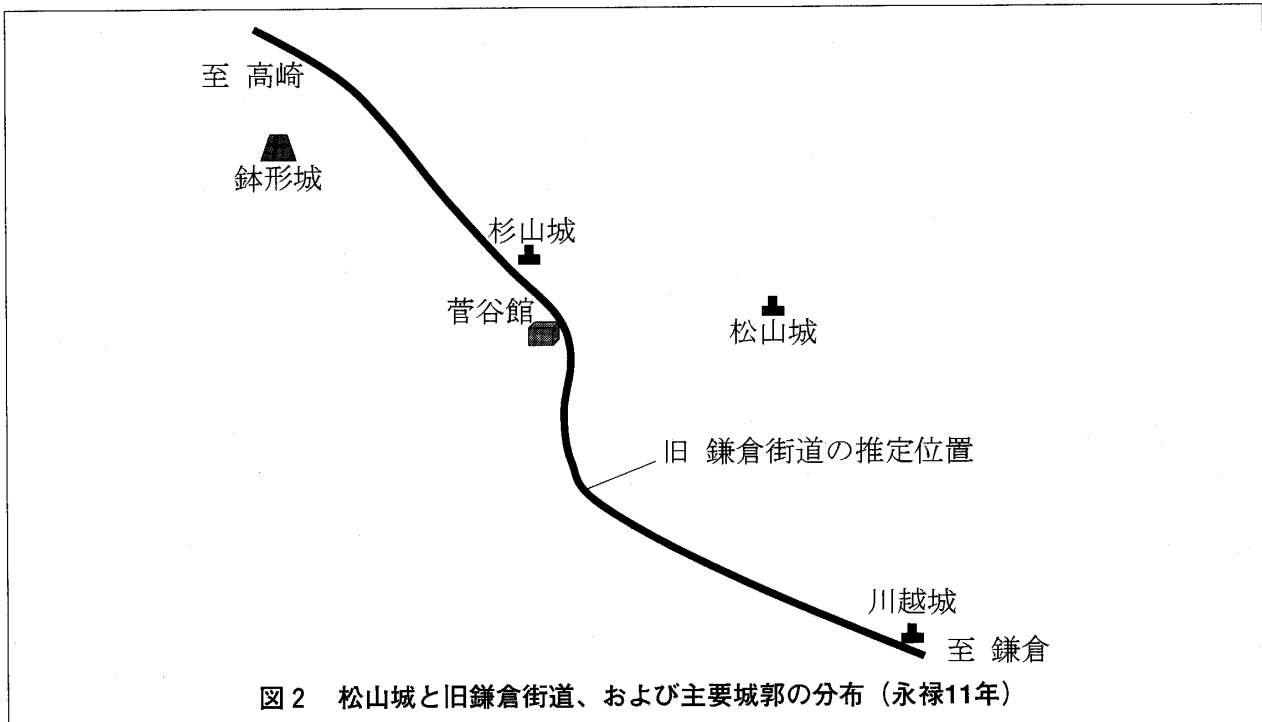


図2 松山城と旧鎌倉街道、および主要城郭の分布（永禄11年）

長い（図1）。したがって、同区間の東方（古河公方）からの防御を考える上で、松山城は重要な意味を持っていると考えられる。

太田道灌と松山城の関係については、口碑伝説や和歌ばかりで、事跡は…不詳である<sup>7)</sup>。松山城は新田義貞が正慶2年（1333）に鎌倉を攻略した際、ここに陣地を築いたのが始まりで、応永6年（1399）扇谷上杉氏の家臣上田友直が築城し<sup>8)</sup>、長禄2年（1458）友直の孫の綱直が、同じ上杉氏に仕えていた太田道灌に城の改修を頼み、構えを整えたという<sup>9)</sup>。また、川越城と鉢形城を結ぶ防御線は<sup>7)</sup>、旧鎌倉街道に沿うものである（図2）。

## 2. 支城制下の松山城

15世紀の末、北条早雲は小田原城を奪い、以後5代約90年の間に勢力を拡大した。北条氏は分国支配の手段として支城制をとり、要所に一族や重臣を配した<sup>10)</sup>。この支城制は、相模国を本丸、武蔵国を二の丸と見做し、広域に渡って、ある種の城郭として機能していたといえる。

## 3. 北条・武田軍による『坑道攻め』と『水攻め』

永禄5年（1562）、北条氏政は越後勢の弱点である冬の豪雪時期に、武田信玄と共に、松山城（城主 上杉憲勝）奪還を企てた<sup>8)</sup>。ところ

が、松山城は堅牢であり、正面からの攻撃は困難であった。そのため、武田軍は城内への地下道を掘り進めたところ、運悪く貯水槽を破り、掘り手に多大の犠牲が出た<sup>8)</sup>。

しかし、これにヒントを得た北条・武田軍は城内の飲料水を断つ水攻めを行った。一方、上杉謙信が越後を出発したとの報があり、北条・武田軍は攻城を早く終わらせるために和睦を進言し、上杉憲勝はこれを受け入れ開城した<sup>8)</sup>。

この「北条・武田軍による坑道」付近には、現在、「吉見百穴」や、より大きな横穴、すなわち、第二次世界大戦末期につくられた「地下軍事工場跡」が散見できる<sup>11)</sup>。つまり、この周辺では、歴史的にも地理的にも異なるタイプの穴が三種存在していたことになり、珍しい地点である。

## 4. 松山城下の繁栄

天正の松山合戦に関する詳細な記録は乏しいものの<sup>7)</sup>、天正18年（1590）豊臣軍が松山城を攻略するまでの30年間、善政により城下は大いに繁栄したといわれる<sup>8)</sup>。城下では毎月6回、5と10の付く日に六斎市（ろくさいいち）が開かれ、近郷近在からの人々で賑わったといわれる。

しかし、徳川家康の関東入封後は、一時松平

氏が城主となるものの、慶長6年（1601）廃城になる<sup>8)</sup>。

#### 5. 松山城の戦略的位置

松山城は、関東のほぼ全域をにらむ武蔵国の北部平野を押さえる位置にある。よって、後北条氏にとっては、松山城を手中にすれば武蔵の大半を制したことになる、上野侵攻の前線基地も得られる<sup>12)</sup> という重要な地点に位置していた。

### Ⅳ. 地理的な視点から周辺環境との関係について

#### 1. 城郭の地理的形状による分類

松山城を、「平山城（丘城）」と見做すか、あるいは、「山城」と見做すかは見方が分かれている<sup>6), 8)</sup>。しかし、表2に示したように、城郭の地理的形状から考えると<sup>13)</sup>、平山城と見做すほうが妥当といえる。

#### 2. 旧鎌倉街道との関係

鎌倉街道は有名にもかかわらず、当時の街道

沿いに現在何が位置しているかの詳細は不明な点が多く<sup>14)</sup>、かつての遺構をわずかに残すのみである<sup>11)</sup>（図2）。なお、鎌倉街道の名が文献上初めて姿を現すのは、江戸時代である（表3）。

### V. 民俗学・文化的側面

#### 1. 風流歌合戦

川越城攻防戦の後、北条軍による松山城攻撃の際に、山中主膳と難波田弾正（松山城代）の間で風流歌合戦がなされた。このことは、名将・智将である難波田弾正に歌の心得があったことを示す、文化的に重要なエピソードである<sup>13)</sup>。

#### 2. 白米城伝説

松山城に関する有名な伝説に白米城伝説がある。すなわち、松山城に水がないことを北条軍に知られないために、毎夕、城の高台で軍馬に白米をかけて夕日に映える白米を水に見せたというものである<sup>7), 8)</sup>。しかし、類似した伝説は、

表2. 形状からみた城の分類（南條<sup>13)</sup> の見解を元に作成）

	特 徴	事 例
やまじろ 山城	山の上だけを利用した城郭。比高（山の麓 <sup>ふもと</sup> から頂 <sup>いただき</sup> までの高さ）が100m以上のもの。戦場として焼け落ちて、現在では、ほとんどが遺構のみである。麓との往来が大変なので、政治的支配、領域支配の点を考えるとあまり高い場所ではなく、しかも要害堅固な城が望ましい。	越後春日城
ひらやまじろ 平山城	比高50m程度のもので、丘城 <sup>おかじろ</sup> とも呼ばれた。山を中心にして周囲の平野も城郭に取り込んだ造りのもの。	近江彦根城、播磨姫路城、肥後熊本城など。
ひらじろ 平城	江戸時代、戦乱が落ち着き、政治支配の拠点として、平野部の町の中心地に築城された。	信濃松本城、出雲松江城など。

表3. 旧鎌倉街道の呼称の変遷

時 代	旧鎌倉街道の呼称
奈良・平安・鎌倉	古官道が根幹。『東鑑』では、主要道を鎌倉往還と呼んだ。
南北朝	『太平記』、『梅松論』は「武蔵～上州路」を上道 <sup>かみのみち</sup> 、「奥州道中」を中道、「常陸・上総」を下道と分けて呼んだ。
江戸	『新編武蔵風土記稿』で、「鎌倉街道」の呼称が現れる。

全国的に80～100話もあることから<sup>8)</sup>、民話的な色彩が強く、史実的には実証が困難といえる。

### 3. 軍用犬のはじまり

太田三楽斎資正は、岩槻城と松山城間に情報伝達のために、軍用犬を走らせていた。よく訓練を重ねた軍用犬は松山城から2時間程で岩槻城に着いたという<sup>8)</sup>。このことは、犬の役割が、第1次、及び、第2次世界大戦での軍用犬や、現在の警察犬・災害時の捜索犬等へと発展した歴史を考える上で重要である。

## VI. おわりに

本稿は、本学（武蔵丘短期大学）のキャンパスに隣接する「武蔵松山城（武州松山城）」について、中学・高校等の歴史教科書で記述がほとんど見られず、一般の方々に詳細があまり認知されていない事象について、様々な視点から、資料としてまとめたものである。

今回整理した資料は、今後、町全体の潜在的価値を高める施策を考える上で役立てていきたいと考えている。今後の展開を考える上で、地域に根ざした情報収集を通して、地域住民、行政との広域的な連携が欠かせないといえる。

近年、松山城に対する行政の動きが進展している。現在、県指定となっている松山城は、国指定になる可能性もある。今後は、松山城に限らず、地元の史跡・文化財の知名度向上のためのイベントを通して、町おこしに貢献していくことが課題である。具体的には、地元の史跡・文化財に関する、親しみやすく、かつ、体系的な内容の観光マップの作成等が挙げられる。

（脚注）

<sup>1)</sup> 国宝：重要文化財のうち、特に文化史的・学術的価値の高いものとして文部科学大臣が指定した建造物・美術工芸品・古文書など。

<sup>2)</sup> 重要文化財：1950年に制定された文化財保護法による有形文化財のうち、重要として文部科学大臣が指定したもの。

## VII. 文献

1. 河合敦：スーパービジュアル版 早わかり日本史、p96、日本実業出版社、東京、2005年。
2. 佐藤俊一：城の見方、p6-9、小学館、東京、2003年。
3. 本山一城：日本の名城がわかる本、p14、リイド社、東京、2005年。
4. 中村良夫：さがしてみよう 日本のかたち②城、p7、山と溪谷社、東京、2003年。
5. 南條範夫：日本の城ハンドブック、p67、三省堂、東京、1993年。
6. 歴史群像シリーズ：戦国の堅城一築城から読み解く戦略と戦術一、p26、学習研究社、東京、2004年。
7. 長澤士朗：武州松山城一松山城をめぐる関東の諸情勢一、177pp、吉見町発行、埼玉、1994年。
8. 西野博通：歴史ロマン・埼玉の城址30選、p26、埼玉新聞社、埼玉、2005年。
9. ふるさとの文化遺産 郷土資料事典①埼玉県、259pp、人文社、東京、1997年。
10. 石井進：『文化財探訪クラブ⑥城と城下町』、p111、山川出版社、東京、1999年。
11. 埼玉県高等学校社会科教育研究会歴史部会：歴史散歩①埼玉県の歴史散歩、334pp、山川出版社、東京、2005年。
12. 歴史群像シリーズ特別編集：[決定版] 図説・日本名城集、p40、学習研究社、東京、2004年。
13. 南條範夫：『日本の城ハンドブック』、p67、三省堂、東京、1993年。
14. 小山和：『古道紀行 鎌倉街道』、p188、保育社、東京、1994年。